
三人の犯罪者

奈森咲良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人の犯罪者

【Nコード】

N2255BA

【作者名】

奈森咲良

【あらすじ】

東京湾の近くに駐車されていた車から男性の遺体が発見される。

警察は自殺と判断するが……。

プロローグ（前書き）

新連載です。感想、評価お待ちしております。

プロローグ

乗客の足を促す様に駅構内に鳴り響く発車ベルと駅員のアナウンスを聞きながら土橋は改札機を抜け今か今かと発進を待っている列車へと走っていた。この列車を逃せば次は三十分後だ。しかも三十分後に来る列車は各駅停車で、急行なら十五分程度で着くものが四十分もかかってしまう。今日は一刻も早く家へ帰って体を休めたい気分なのだ。

土橋は警視庁組織犯罪対策部組織犯罪対策五課に所属する警察官である。組織犯罪対策部は読んで字の如く組織的な犯罪を取り締まったりする部署で、暴力団事犯等も彼等の担当となることが多い。土橋は今年で四十になるが、警察官になってこれまで大きな手柄を立てたことはない。だが土橋自身としては自分の働きがもっと評価されても良いはずだと常々思っていた。自分は今まで仕事を何よりも優先し、家族という代償を払って日本警察の為に尽力してきたつもりだ。しかし、自分の働きは何時までも評価されはしない。最近じゃ年下の男に階級で上をいかれてしまった。屈辱的だった。見返してやりたい。自らの存在を警察に認めてもらいたい。土橋は何時しかそんな考えを持つようになっていた。

自宅からの最寄り駅である緑台駅に着いたのは午後十時頃だった。何とか列車に乗り込むことが出来て、遂今し方到着したところだ。駅から自宅のマンションまでは歩いて十分程。土橋はその道のりを重い足取りで歩きだそうとしていた。

(……ん)

駅を出たところでふと土橋は足を止めた。視線の先には二人の男女が居て土橋の視線には気づいてはいない様子だ。

(……どうして)

土橋はしばらくそこに立ちすくんでいたが、やがて男女が歩き出すと自然と動き出していた。男女は土橋の自宅とは正反対の方向へ歩いていくが、土橋の足は躊躇なく男女の後を追っていた。早く帰宅しようとしていたことなど既に頭には無かった。

第一章・警察官の死（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

第一章・警察官の死

東京湾から車で十分程走ったところに「バリー」という名の洋食屋がある。そこが金山優子の勤務先であった。金山が「バリー」でアルバイトとして働き出したのは二年前、彼女が二十歳の時である。

「バリー」は彼女の自宅から車ですぐの場所にあり、更に給与もそこそ良いとあって求人広告を見た金山は即決でここを勤務地として選んだ。元々接客には慣れていたから仕事もすぐに覚えられたし職場の雰囲気も悪くない。金山は「バリー」が好きだった。

今日十月十日は金山が掃除当番の日であった。当番の人間は開店前誰よりも先に店に入り店内の掃除をしなければならぬのだが、この作業がなかなかしんどいもので一週間に一度の当番の日は少し憂鬱な気分になるところが正直なところある。掃除当番は二人一組制。金山が店に着いた時関係者専用駐車場に既に車が一台止まっていたのもう一人が既に来ているのだと思い、彼女は少々急ぎ足で店の裏口へと歩いていった。

「あれ？」

てっきり鍵が開いているものだと思ってドアノブに手をかけた金山だったが思いに反して扉は開くことを拒んだ。どうやら鍵が閉まっているらしく、何度かガチャガチャと動かしてみても扉は開かない。妙に思いながら金山がバックから鍵を取り出そうとした時、後ろから車のクラクションが聞こえてきた。金山がそれに反応して振り返るとそこには既に到着していると思っていたもう一人の当番の女性が車で出勤してきたところであった。

「おはようございます」

車から降りてきた女性が挨拶をした。彼女は金山より二つ年上で名前は日村という。とても真面目な女性だ。

「おはようございます。日村さん、今来られたんですか？」

「え？ ええ。そうですよ」

変なことを聞く。という顔を日村はした。

「私、てっきりあの車が日村さんの車だと思って、もう来てらっしゃるんだと思ってました」

そう言われて日村は駐車場入り口付近に止められている黒の車に目をやった。

「あれ、あの車金山さんのじゃないんですか？」

「違いますよ。私のはあっちです」

「……じゃあ、あの車誰のなんでしょう」

ここは関係者専用の駐車場である。基本的には店で働く人間しかここには止めないのだが、今日この時間には自分達しか来ていない筈だ。一体誰が止めているのだろう。

と、その時金山が車の中に誰か乗っているのに気がつく。運転席で眠っている様子だ。二人は好奇心に駆られ車に近づいていった。

「誰か寝てますよ」

車内では中年の男性が運転席で眠っていた。二人共面識はない男性だ。金山が運転席の窓ガラスをノックして男性を起こそうとしたのだが男性に反応は見られない。やがてじっと男性を見ていた日村の顔がだんだん青ざめていった。

「……………金山さん。こ、この人、息してませんよ」

「えっ？」

二人は思わず反射的に車から離れていた。

警視庁捜査一課に出動命令が出たのは午前八時前のこと。ちょうどその時出勤してきた高木渉は一息つくまもなく部下の大山と現場へ直行することになった。

警視庁捜査一課強行犯捜査三係の警部である高木渉は今年三十三歳。六年前に結婚し、現在五歳になる娘も居る。ただ刑事という職業柄、あまり一緒に居てやれる時間は少ないのだが娘がそれに対する文句を言ったことはなかった。五年前、娘が生まれてすぐに高木の妻・美和子は交通事故でかえらぬ人となり以来高木は男手一つで娘を育ててきた。母親が居ない寂しさもきつとあるはずなのに娘がそれを口に出すことはない。そういうところは母親にそっくりだった。

「警部、着きましたよ」

大山に言われて高木は我に帰った。既に車は現場に到着していて周りにはパトカーが数台止まっており物々しい雰囲気醸し出してい

る。二人は車から降り立ち入り禁止のテープをくぐって中に入った。

「状況は？」

鑑識の男性に聞いた。

「亡くなった男性は、車内で練炭を焼いていました。一酸化炭素中毒により死亡したものと思われます」

「自殺、ですか？」

「まだわかりませんが、その可能性が強いかと」

車の中を覗き込んだ高木は後部座席に置いてある練炭を発見する。車の窓は閉め切られていたらしく自殺の可能性が高いと現場鑑識は判断していた。

運転席で亡くなっているのは四十歳ぐらいの男性だ。ふと高木は男性の顔を見て何かに気づいた。

「どうしましたか？警部」

「……この人」

男性は警視庁組対五課の警部補、土橋康隆であった。

第二章・高木の依頼

米花駅周辺には雑居ビル等が多く立ち並んでいる。小さな会社だったり新聞社だったり駅を一步出れば嫌でも看板が目に残まるだろう。

「工藤探偵事務所」はそういう一角に居を構えていた。

三階立てのビルの二階を借り探偵事務所を開設したのは二年前のこと。大学を卒業した工藤新一は念願だった自らの事務所を持つと同時に正式に私立探偵となったのである。

しかし、正式に探偵となってからの新一は以前の様にメディアへ露出することもなければ警察から捜査協力を依頼されることも無くなっていた。勿論ゼロという訳ではないが、それでも七年前に高校生探偵として活動していた頃と比べると明らかに減少はしているだろう。元々私立探偵が殺人事件の捜査に加わるなどということは有り得ないことで七年前が変わったと考えることも出来るのだが、それにしてもこのあまりの関係の変化には何か裏があるのではないか。そう考える人物も少なからず居ることも確かだった。

この日新一は午後から探偵事務所を開け米花駅近くにある喫茶店に入った。ここで人と待ち合わせをしているのだ。新一が店に入るとその待ち合わせ相手は店内の一番奥の席に座っていて、新一に気付くと席から立ち上がり声をかけた。

「やあ、こっちだよ」

人懐っこい笑顔を新一に向ける男性は警視庁の高木渉であった。

新一が高木とこうして会うのは三ヶ月ぶりである。高木は警視庁に勤めながらも新一には協力的な人物で、高木が時折捜査協力を内密に依頼することがあった。七年前はどこか頼りなげに見えたこの男も今や警視庁捜査一課の警部だ。まあ相変わらずの弱気な部分は以前と変わらないが、そこが彼の良さでもあるのだろう。高木と向かい合いに座った新一は注文を取りに来たウェイトレスに「いつものやつ」と頼んだ。この喫茶店は探偵事務所からも程近く、新一もよく利用するのでこれで充分通じるのである。

今回も新一を呼び出したのは高木の方だ。昼食を摂っている時に電話があり約束を取り付けてきた。幸い、午後から予定は空いていたので了解したのだが、どういう事件捜査をしているのか新一には全く心当たりが無かった。目下のところ、警視庁管轄内で殺人事件発生ニュースを新一は目にしていない。しかも部下の若い男性を引き連れず一人で居るというのも妙に引かかる。そんな新一の考えを見透かした様に高木は口を開きだした。

「実はね、今日は殺人事件の捜査協力というわけじゃないんだ」

「……と、言いますと？」

「うん……。捜査協力依頼は間違いないんだけど、殺人事件ではないんだよ」

新一は思わず目を丸くした。どういふことか状況が上手く呑み込めない。

「まあ、つまり。自殺案件なんだ。警視庁が自殺として処理した件の捜査協力をしに来たんだよ」

高木はその案件の概要を新一に説明した。

事の始まりは二日前の十月十日。東京港から歩いて十分程した場所にあるレストラン「バリー」の関係者専用駐車場に止められていた車の中から男性の遺体が見つかった。男性は警視庁組対五課に勤める土橋康隆警部補四十二歳。死因は一酸化炭素中毒によるもの。車内では練炭が焼かれ、車の窓も完全に密閉されていたことから警察は自殺だと判断したのである。

しかしここで一つ疑問が生じた。自殺の動機である。車内から遺書らしきものは発見されず自宅等も調べたらしいのだが自殺の動機と呼ぶに相応しいものは全く見つからなかった。更に土橋が所属していた組対五課の人間も彼が自殺するとは到底思えないと皆口を揃えている。土橋は亡くなる一週間程前に密輸拳銃を摘発するという手柄をあげており、ますます自殺する理由が無いではないかと捜査陣は色めき立った。その結果、土橋の遺体は司法解剖に回され殺人の可能性がないか調べたらしいのだが、怪しいところは見つからなかった。強いて言えば土橋は亡くなる前に睡眠薬を服用していたことがわかったのだが、それも土橋が苦しまずに命を絶つ為に飲んだものだとされ、結局当件は自殺として処理されたのである。

が、しかし。高木はこの判断にいまいち納得がいていなかった。高木も土橋という男がどのような人物であるかはわかっている。部署が違うとはいえ顔見知りだし、例の拳銃摘発で彼は一躍警視庁内の有名人となったのだ。そんな人が自殺などするとは到底思えない。それに警察は結局動機不明のまま捜査を終了してしまっている。動機がない自殺には犯罪が隠れているものだ。高木は自ら立ち上が

り捜査続行を上司に進言したらしいが当然受け入れられる筈もなく、残る最後の頼みの綱である新一に協力を頼みに来たのだという。

「……………」

高木の話を終始無言で聞いていた新一は話が終わったとみるや静かに口を開いた。

「土橋警部補の自宅はどちらでしょう」

「…………えっ、ああ。緑台の方だけど」

「では、車を廻して頂けますか。高木刑事、車で来てますよね」

「…………ああ。じゃ、じゃあ引き受けてくれるんだね」

「ええ。僕もちょっと興味が湧いてきたので、調べてみたくなりました」

そう言うと高木は嬉しそうに席から立ち上がりテーブルの伝票を取るとレジで会計を済ませ、すぐに近くのコインパーキングへと車を取りに走っていった。

その後ろ姿はお小遣いをもらってお菓子を買いに出掛ける子供の様に見えた。

第三章・手掛かり（前書き）

一週間ぶり更新です。感想お待ちしております。

第三章・手掛かり

米花駅から緑台にある土橋康隆の自宅までは車で十五分程の距離である。高木の運転で辿り着いたそこは三階建ての小さなマンションで白壁が美しく映える建物であった。土橋がここで暮らし始めたのは十年近く前のことらしいがその時は家族と共に住んでいたらしく、一人暮らしになったのは三年程前から。土橋は元来仕事一筋で家庭を顧みなかったそうだから、それが離婚の原因ではないかと高木は言う。警察官という職業柄そういうケースで離婚することはなにも珍しいことではないのだ。

二人はマンションに入り、まず管理人室のチャイムを鳴らした。透明ガラスの向こうから返事が聞こえたかと思う間もなく、奥から頭髮の薄くなった管理人の老人が姿を見せた。老人は以前来たことのある高木の顔を見て少々驚いた様子を見せている。

「あれ、この間の刑事さん。まだ何か用ですか？」

「何度もすいません。実はまた、土橋さんの部屋の鍵を開けてもらいたいんです。少々調べたいことがあります」

「……またですか。もうあれは、自殺で捜査が終わったと聞きました」

「すいません。色々都合がありました」

管理人の老人は面倒くさそうに奥へと合い鍵を取りに向かい、しばらくして管理人室から姿を見せた。全体像をこの時初めて見たが、小柄な老人だ。老人は二人を案内するかのようにエレベーターに向

かつて歩き出した。土橋の部屋は二〇三号室であった。

管理人の老人は終わったら声を掛けるように言うさつとその場を立ち去っていった。室内は中年男性の一人暮らしにしては綺麗な方でベランダには洗濯物が干されたままになっていた。室内に入つてすぐのところに寝室があり、その枕元には寝る前に読んでいたのか一冊の本がしおりを挿んで置かれている。壁にはカレンダーが掛けられていて、側のゴミ箱には先月のカレンダーが捨てられていた。そのカレンダーの日にちに赤いペンで丸印が付けられている箇所があった。十月一日と九日の二つである。十月九日といえば土橋が亡くなった日だ。しかもそこには「二十三時、バリー」の文字も確認出来る。土橋は亡くなった日、しかも遺体が発見された場所で誰かと待ち合わせをしていたのではないか。もしそうだとしたら、その待ち合わせ相手が土橋の死に深く関与している可能性は充分考えられることだろう。

「あなたの予感当たっているかもしれませんね。高木刑事」

新一が高木を見ながら言った。高木は静かに唾を飲み込んだ。

管理人の老人は今度はなかなか姿を現さなかった。どうやら用を足していたらしくかすかに水を流す音が聞こえてきた。新一は老人に鍵を渡すと

「ちょっとお尋ねしますが、九日の夜土橋さんが出掛けたことはご存知でしょうか」

「ええ？ ええ。知ってますよ。十時半頃じゃなかったかな」

「その時、土橋さんはお一人でしたか？」

「ええ。一人でしたよ。誰かと待ち合わせをしてるみたいでした」

その言葉に二人は反応した。

「どうして待ち合わせをしているの？」

「電話をしてたんですよ。その電話相手に“今から行く”とか言ってたんで、てっきり誰かと待ち合わせでもしてるんだろうって思ってたんです」

やはり土橋はあの日誰かと待ち合わせをしていたのだ。その相手を特定出来れば、きっと捜査に大きな進展をもたらすだろう。

その後高木は新一を米花町まで送った後土橋の携帯電話の着信履歴を調べる為警視庁へと戻った。もし待ち合わせ相手が土橋を手に掛けたのだとしたら、練炭を用意し睡眠薬まで服用させていることから考えても計画的な犯行の可能性が高い。そんな犯人が自らの足がつく手掛かりを残したままにするとは到底思えなかった。履歴を削除されているかもしれないが、その時には科警研に頼んでデータ復元してもらえばいい。どっちにしろ待ち合わせ相手の特定は時間

の問題だろう。

高木はアクセルを強く踏んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2255ba/>

三人の犯罪者

2012年1月12日19時45分発行